

自省

9月の或朝、ラジオ番組の「私たちの言葉」で、次のような話が語られていた。

それは祖父母の老夫婦と、孫に当たる八歳の女の子との3人暮らしの家庭に起こった、ほえましいさやかなエピソードなのだが、祖母の誕生日にその孫が「今日はおばあちゃんは何もしないで、みんな私に任せてちょうだい」と言い、ひとり忙しく立ち回っている。子供のことであり、どうすることかと案じていると、やがて「もういいですよ」という案内。茶の間に入ってみると、祖母がいつもするように食卓に白いテーブルクロスをかけて、ビールやジュースや料理がならべられてある。孫がハッピーバースディの歌をうたい「おばあちゃん、おめでとう」と、リボンをかけた小さな箱をさし出す。プレゼントである。何かしらと開けてみると、中にはトランプ位の紙片が2枚入っていて、1枚にはお使い券、1枚にはあんま券と書いてある。

そして「いつでもいただきます」と添え書きがしてある。祖父と祖母は胸が一ぱいになって、しみじみと感謝をするのだった。

話しというのはこれだけのことなのだが、祖母がそのよろこびを、この番組に投書せずにはいられなくなったその気持ち、電波を通じて胸にしみいるのをおぼえたのである。

私はこの話からいろいろのことを、改めて考えさせられる。先ず、この家の和やかさを尊いと思う。何か宗教を信仰しているのだろうか。信仰していないとすれば、なおさらのこと、その人柄のよさに頭が下る。

この道の信心をしても、何かと言えば家庭に波風のたちさわぐことが多い。信心が未完成なのと、もう1つは、本当に信心によって助かろうという気がないからだろう。そこを手もとの問題として、おかげをうけたいものと思う。

次に昔から「おばあちゃん育ちは三百やすい」と言われる。まちがった祖母の愛情が大切な孫の、人間形成の邪魔をするからだ。

孫をめぐって、若い母と祖母との間に意見の対立を見ることも多い。ところで、この家庭では、親がいなかったため、ふびんさが一層強く溺愛に陥りやすいはずなのに、何と見事に自主性を身につけた、美しい情操の持ち主に育て上げていることか、孫のよきはそのまゝ祖父母の人柄のよさを反映していると言えよう。

次には、物の観方の問題である。この女の子の感動してみる人もあろうし、年よりはませた子供らしくない子供と、眉をひそめる人があるかもしれぬ。その子に実際にふれてみなければ、どちらが正しいかともいえぬが、信心する者は、自分だけの憶測や、偏見、独断で物事を観て判断を誤り、人を傷つけ自分の首をしめるような、愚かなことはしたくないものだ。

人の世には、鼻もちならぬうぬぼれ屋、正しい判断を好まぬへそ曲がり、はては権利だけふり回して、義務はそっちのけの一人よがり、へいこらしながら、することは人を喰ったいんぎんぶれい、悪いとわかりながら、すなおに頭を下げることの嫌いなくそ勝気、秩序をわきまえぬ恥しらずがいつの時代にもいる。

人事ではない。信心して神に喜ばれる人間になるには、先ず人の心に感動をあたえる現実生活がなければならぬ。

<昭和41年11月20日>